池と湖が合流するとき

空が紫色に変わった。

宵（よい）の入り口。

腕につけた黒い安物の腕時計を確認すると、午後６時を回ったところだ。

夏のはじめである。

俺はこの渦を巻く瞳と心で、異世界をたくさん見てきた。

しかし、今見ているこの世界が、

現実なのか異世界、非現実なのかはっきりと区別がつ

かなくなっている。

色眼鏡などをかけているわけではない。

だけど空が見たこともないような濃い濃い紫なのだ・・・・・・・・。

端っこが千切れた薄い雲が、今にも吸い込まれそうなその紫の空の上と下に漂うようにゆっくり動いている。

空と地平とが交わってしまえばいいのになんて、苦しい時はそんな風に思ったりもするが・・・。
そんな感じのことが現実に起こっている。紫の空。

その紫の空の真下の荒野には、

大きな池と小さな湖とがあった。

人々は叫びながら騒いでいる。

だけど屋台を出している。

白いテントの屋根でたこ焼きやフランクフルトを焼いている。的屋だ。

大通り。

俺は店主さんに声をかけた。

体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました。